

## 近代海軍における日米両国の昆虫観の比較

保科 英人<sup>1)</sup>

### I. 日本人だけが虫好き民族か？

昆虫生態学者の藤崎憲治京都大学教授は 2000 年代にヒットしたムシキングを評し「ムシキングのような昆虫産業の一種が成り立つのは日本ぐらいで、そういう意味では日本人の昆虫好きは現代にも引き継がれている」と、日本人の虫好きぶりを特筆すべきものと言及した(藤崎, 2009)。これは決して日本人の独り善がりではない。実際、来日した外国人も日本人独特の昆虫観に対し感嘆することも少なくないのだ(保科, 2014)。だが、「我々日本人は世界一の虫好き民族」との自負は決して間違いではないにせよ、我が国の新聞のコラム等からは「日本人だけが唯一の虫好き民族」と言わんばかりの過剰意識が見受けられることもある。本稿ではこの自負から一歩後ろへ引いて、昆虫への親近感において日本が他国に負けている事例をあえて紹介したいと思う。

### II. 虫の名を冠するアメリカ軍正規空母

「虫好き」勝負で日本人が負けた事例の舞台となるのは近代海軍である。トンボやチョウをあしらった異形な兜の時代(例えば、橋本, 2013)が過ぎ去り、明治建国の時代が到来すると近代日本陸海軍の武装や兵器に昆虫色を見出し難くなる。やがて、昭和 16 年大東亜戦争開戦。太平洋を進攻する日本海軍の前に虫の名を冠する 2 隻のアメリカ海軍の航空母艦(=空母)が立ちはだかった。その名を「ワスプ」「ホーネット」と言う。共にスズメバチないしはジガバチを意味する艦名である。確かに大空を雄飛する多数の艦載機を擁し、敵艦を自由自在に攻撃する空母はスズメバチそのものだ。なお、「ワスプ」は潜水艦、「ホーネット」は空母艦載機と、共に日本海軍の手によって沈没させられている(平林, 2004)。

相対した日本海軍であるが、大東亜戦争時の空母は「飛龍」「雲龍」「海鷹」「大鳳」「隼鷹」とドラゴンや鳥系の漢字がずらりと並ぶ。アメリカ軍とは異なり空母の名に虫の名は一切登場しない。日本海軍当局には空母に「雀蜂」(スズメバチ)「鬼蜻蜓」(オニヤンマ)などと命名する嗜好はなかったようだ。

空母以外では、「大鯨」「迅鯨」などの潜水母艦、「千

鳥」「真鶴」などの水雷艇といった、クジラと水鳥に由来する名を持つ諸艦艇が戦争中活躍した。また、「栗」「蓮」「朝顔」等のお世辞にも屈強とは思えない植物名を冠する駆逐艦もあった(坂本・福川, 2003)。にもかかわらず、日本近代海軍約 80 年の歴史の中で昆虫由来の艦艇名は全く見当たらない。

どうやら日本海軍は大海原を進撃する軍艦に昆虫、と言うよりは無脚(ただしクジラは例外)、四つ脚、六つ脚の動物の名を付ける発想をそもそも持たなかったらしい。軍艦の名前の由来となる動物は、クジラ以外はドラゴンと鳥ばかりなのである。では、大空を雄飛する航空機はどうか。大東亜戦争の戦場に配備された海軍航空機には、「零式艦上戦闘機」(ゼロ戦)に代表される皇紀由来の機体のほかに、「月光」「彗星」「強風」「紫電」などの天体や天候に由来する名前が並ぶ一方で、なぜか肝心の鳥が登場しない。フシギと言えばフシギだ。

日本陸軍の方は一部の航空機体に「隼」「飛燕」「屠龍」と鳥系・龍系の名を名乗らせた。しかし、昆虫や哺乳類の名称を冠する陸軍機体はやはり存在しない。かつては陣羽織に描かれた「勝ち虫」ことトンボに因む「銀蜻蜓」(ギンヤンマ)「羽黒蜻蛉」(ハグロトンボ)などの勇名を空翔る戦闘機に与えてやれば日本はアメリカに勝てたのに、などと幻想に浸りたくもなる。

一方、アメリカ海軍は上述の「ワスプ」「ホーネット」の空母ほか、戦闘機にはなぜか地べたを這いずる哺乳類の「バッファロー」「ワイルドキャット」(ヤマネコ)などと命名したし、「シーライオン」(アシカ)と言う名の潜水艦も保持していた。また、水陸両方に着陸できる汎用機はグラマン J2F「ダック」(アヒル)と名付けられた(平林, 2004)。アメリカ海軍は動物に由来する命名に対してかなり柔軟な思考を持っていたことがわかる。

日本軍は艦載機による真珠湾奇襲で「航空機は海上及び陸上戦力に勝る」事を自ら実証しながら、肝心の自分たちが「戦艦や陸上歩兵こそが主兵力」との旧式の戦術観を変えられず、敗戦寸前まで航空兵力を軽視し続けた。その結果、日本陸海軍が壊滅したことは言うまでもない。にもかかわらず軍艦や戦闘機の命名の時だけは、

<sup>1)</sup> Hideto HOSHINA 福井大学教育学部

地上の四つ脚六つ脚の動物には目もくれず、鳥と龍に想いを馳せ大空ばかり見上げていたわけで、皮肉と言えば皮肉である。

太平洋で死闘を尽くした日米両軍の兵器名からも両者の昆虫観及び動物観の違いがうかがい知れ、これはこれで面白くはある。とりあえず、あくまで軍艦の名前だけ見れば、近代海軍においては日本よりもアメリカ側に昆虫に対する強い親近感が滲み出ている、との結論になる。

### III. あるにはあったトンボの名を持つ海軍航空機

厳密に言うと日本海軍が所有した飛行機に虫の名を持つ機体は存在した。九三式中間練習機、愛称“赤とんぼ”である(井上・谷, 2010)。では、なぜ九三式中練が“赤とんぼ”との愛称で呼ばれたか。それは技量未熟者が操縦していることを周囲の一般機に知らせ注意を促すため、機体全体を目立つ黄色で塗っていたからである(野原, 2004)。

しかし、“赤とんぼ”は練習機であることに加え、所詮は正式名ではない綽名に過ぎない。第一線に配備されたアメリカ軍正規空母「ワスプ」「ホーネット」とは戦場における重みが全く異なる。したがって、「近代海軍における昆虫好き勝負はアメリカの勝ち」との筆者の結論に揺らぎはない。

余談ながら、日本人なら誰もが知る三木露風作詞の童謡「赤蜻蛉」だが、歌唱中に登場する赤とんぼとは一体何の種であるかは論争が繰り返されてきた。歌詞中の赤とんぼとは文字通り体が赤い分類学上のトンボ科アカトンボ属(=アカネ属)ではなく、橙色系のウスバキトンボであるとの説も有力である(例えば、杉村・一井, 1990)。

日本海軍の九三式中間練習機は多少赤味を帯びていたとは言え、黄色系機体だったことは上述の通り。そして、九三式中練は海軍飛行兵のみならず一般国民からも“赤とんぼ”と呼ばれ、広く知られた機体であった(三井, 1994)。このことは少なからぬ日本人がウスバキトンボを「夕焼け小焼けの赤とんぼ」のイメージに重ねていた、との一つの状況証拠とも言えそう。まさか体色が黄色のキトンボやオオキトンボがアカトンボ属のトンボだからとの理由で、九三式中練を“赤とんぼ”と呼んだけわけではあるまい。三木露風本人の意思はともかくとして、多くの日本人は幼き日々に見た黄色のトンボを“赤とんぼ”と懐旧することに抵抗がないようなのである。

### 引用文献

藤崎憲治, 2009. 昆虫文化の再生のために. p. 541-562.  
藤崎憲治・西田律夫・佐久間正幸編. 昆虫科学が拓く未来. 京都大学学術出版会. 580 pp.

橋本麻里, 2013. 変り兜. 戦国の COOL DESIGN. 新潮社. 125 pp.  
平林高士, 2004. アメリカ海軍航空母艦 80 年史. ダイヤプレス. 130 pp.  
保科英人, 2014. お雇い外国人グリフィスが描いたお伽話の中の日本の甲虫たち. さやばねニューシリーズ, (13): 26-34.  
井上清・谷幸三, 2010. 赤トンボのすべて. トンボ出版. 183 pp.  
三井一郎編, 1994. 世界の傑作機. 93 式中間練習機. 文林堂. 88 pp.  
野原茂, 2004. 赤トンボ操縦術. 九三式中間練習機フライト・マニュアル. 光文社. 135 pp.  
坂本正器・福川秀樹編, 2003. 日本海軍編成事典. 芙蓉書房出版. 641 pp.  
杉村光俊・一井弘行, 1990. トンボ王国へようこそ. 岩波ジュニア新書. 204 pp.